

2023年10月22日（日）／説教者：神谷武宏

説教：「キリストはあなたと共にある」

聖書：コリントの信徒への手紙一 2：1～5

聖書は、「キリストはあなたと共にある」ということを様々な個所で記している。キリスト誕生の中で「神は我々と共におられる」という。ただ、私たちは見えない神をどのようにして「共にある」ことを感じ取ることが出来るのか。

トルストイ作「靴屋のマルチン」の物語で、マルチンは人との温かい会話、何気ない思いやり、愛あるやり取りの中で、出会う人の中にキリストを見せられて行くが、ヨハネの手紙一 4章に「いまだかつて神を見た者はいません」（12節 a）とあるように、確かに私たちは神をこの目で見ることはできない。ただ、「わたしたちが互いに愛し合うならば、神はわたしたちの内にとどまる」（12節 b）とある。神の姿は「愛」の形を通して見せていただくという。

コリントの手紙一 2章から「キリストはあなたと共にある」ということを見たい。パウロは 3 節で「わたしは衰弱していて、恐れに取りつかれ、ひどく不安でした」という。コリントでの宣教の厳しさを表現している。この箇所の「わたしは」とは、ギリシャ語原典を見ると「カゴー」が使われている。カゴーとは、「私もまた」という意味になる。直訳すると「私もまた、衰弱していて」となる。「私もまた」とは「私もまた、そうだった」と言うことになる。では、「私もまた、そうだった」とは他に誰がそうだったとパウロは言うのか。それは、イエス・キリストを指している。「イエス・キリストもまた、私と一緒に衰弱していて、恐れに取りつかれ、ひどく不安を抱いてくれた」ということ。

イエス・キリストが、あの十字架にはりつけにされたということは、神は「弱さ」を担うということを示しておられるということである。「弱さ」を担うということは、私たちの恐れ、不安、衰弱しきったその身体と共にキリストはあるということ。パウロはキリストの十字架をそう理解した。ゆえに「イエス・キリストもまた、私と一緒に衰弱していて、恐れに取りつかれ、ひどい不安を抱いていた」と言うのである。コリント一 1章 18節の「十字架の言葉は、滅んでいく者にとっては愚かなものですが、わたしたち救われる者には神の力です」という言葉が、私たちの心にも滲みてくるのではないか。

「キリストはあなたと共にある」のであり、今、戦争で、苦難の只中にある人々と、苦しみ、悲しみ、嘆く人々と共にあることを覚え、キリストを十字架へと追いやるこの国々の在り方、社会に目を向けて、まことの平和を祈ろう。私たちに出来る平和の働きを担っていこう。（神谷）